

## 令和7年度 第21回 佐久市児童生徒美術展 日向裕・綾 美術コンクール 審査講評

### 総評

本年も270点を超える子ども達の素晴らしい作品に出会うことができました。これは日々子ども達を丁寧にご指導されている学校関係者の皆様や日々の成長を優しい視点で見守られている保護者の皆様、そして貴重な機会を与えてくださる佐久市と美術館のスタッフの皆様のご努力と御好意のお陰だと思えます。この場に居合わせていただきましたことに深く御礼申し上げます。

さて今回の審査に当たり、一点の反省から述べさせていただきます。1月28日の朝、審査会場に足を踏み入れた際に、広げられた作品を見渡すと前年よりも少し大人しい印象を受けました。これは私が期待していた「子どもの絵」とのギャップから来たものだと思います。しかしながらその後の審査で一点一点の作品と向き合うと、これまでの審査で感じていたものと同様に、子ども達のパワーに圧倒されました。やはり子ども達は変わっていないと安心感を覚えると同時に、「大人の期待(子どもらしい絵)」を抱いていた自身を深く反省することになりました。

では、「子どもの絵」とはどのような物なのでしょう。昨年の審査講評でも書かせていただきました通り、子ども達自身にとってのリアリティ(真・善・美)に関わっています。決して技術的に絵が上手いか下手かの次元ではなく、子ども達自身を取り巻く環境(自然界の環境や動植物、人との関わりなど)と、どの様に関わっているのかが表出されたものです。言い換えれば、作品は子ども達に対峙している世界を私達に見せてくれています。このことから本来的には「子どもの絵」は大人が考える「子どもらしい絵」ではないのです。

私達大人も数十年前は子どもの時代を過ごしました。私達もまた野原で出会う動植物と触れ合い、学友と遊び、大人の暖かい支援を受けながら幼少期を過ご

してきました。かつて私たちが子どもだった頃に描いた作品は、技術的な不足があるにしても、その当時のそのままのリアリティを持っていました。この事は今も全く変わっていないでしょう。

子どもは変わっていないとして、子ども達を取り巻く環境はどうでしょうか。私達が幼少期に体験し得なかったインターネット上で広がる世界やゲームなどのバーチャルな世界との接触は、現在の子供達にとっては日常的に行われています。このバーチャルな世界との接触は、もはや善悪で判断されるものではなくなりました。子ども達の生活の中で当たり前に触れ合う世界の一つなのです。

このことから、かつて子どもだった大人が勝手に思い描く「子ども感」は、常に変化し「子どもらしい絵」を求めることは、それ自体が大人のエゴとして捉えざるを得ないのです。今を生きる子ども達もこれまで同様に生活の中での体験を通して、様々な世界との関係を築き関わる中で、バーチャルな世界とも関わりを持つようになったただけなのです。世界と対峙するという子ども達の生活におけるリアリティは何も変わっていません。これは私たちが子どもだった頃にはなかった世界との関わりなのです。

大人が求める「子ども感」もしくは「子どもらしさ」は、かつての私達もそうであったように「自然豊かな」環境を存分に味わい、そこで見たことや感じたことを身体を持って素直に表出することではないでしょうか。しかし今を生きる子ども達にとって、これまで同様に「自然豊かな」にさらには「情報豊かな」が加わった世界で生きることを強いられ、身体と情報収集能力を持って素直に表出することが求められているのかも知れません。それが今を生きる子ども達にとっての世界との関わりであり、リアリティになっているのではないのでしょうか。この様に考えると、「子どもらしい絵」を描く事は不可能であり、もしそのような作品が作られているとすると、その場に立つ大人の介入が



影響しているのではないかと考えてしまいます。

私達大人は日常生活の中で常に何かしらの選択に迫られています。大人は既存の選択肢の中から、より適格な物を選ぶ力を身に付けてきました。しかしながら子ども達は、創造の世界を通して、未だない選択肢を自ら作り出す世界で力強く生きています。私たちが子ども達の作品を鑑賞することは、大人を未知の世界との出会いに導いてくれます。言い換えると私達大人は子ども達の作品から再び世界への気づきや学びを得ている様に思われます。今回展示された子ども達の作品を観ることは、私たちが子どもに学び、子どもと共に成長する機会となるのかも知れません。

**審査長 猪瀬 昌延 (信州大学 教育学部 准教授)**

## 審査を終えて

今回の作品群からは、子どもたちが日常の中で感じ取っている世界の広さと深さが、実に多様なかたちで表現されていることが強く伝わってきた。身近な題材から空想の世界、目に見えない存在に至るまで、発想の自由さと表現の工夫が際立っていた。

中学3年生の入選作「対応」は、現代社会におけるスマートフォンとの関係性を鋭く捉えた作品である。便利であるがゆえに手放せず、気づかぬうちに心身に影響を及ぼしていく様子を、円形という構成の中に象徴的に表している。生まれたときからスマートフォンが身近にある世代の時代性を映し出す、示唆に富んだ表現であった。

「どんな音？」をテーマとした立体作品では、中学1年最優秀賞《どんな音？「ザザザァァァザザァァ」》が印象的である。海とも水とも限定できないが、全体から“うねり”の感覚が伝わり、音を視覚化する力に優

れていた。キャラクター的表現が多い中で、感覚そのものに迫る造形が際立っていた。中学3年最優秀賞《どんな音？「ひゅう/ばさ/からから」》は、神社前に吹く風という情景をもとに、目に見えない存在を形にする試みが秀逸であった。

4年生の空想の花の作品群も魅力的である。優秀賞《雷雨花》は太い雷を花に見立てる大胆な発想が光り、奨励賞《宇宙で美しく咲いてる花》は水彩の重なりとぼかしによって奥行きのある宇宙空間を表現していた。《雲の花》《まぼろしのとぶ花》など、ユーモアを感じさせる作品もあり、想像力の豊かさがうかがえる。

卵の形を生かした低学年の作品では、小学2年《ねこのかたちの花火大会》が、白黒を基調にピンクを差し色とした洗練された色使いで目を引いた。パターン化された猫のモチーフも効果的である。小学3年《ぜん》は形と色の構成そのものを楽しむ抽象的表現が際立ち、大人びた感性を感じさせた。

個人応募部門の《白菜》は、限定された線と色による簡潔な構成が印象的で、モチーフを新鮮な視点で捉える力を示していた。

全体を通して、見えるものだけでなく、音や風、感覚や社会との関係といった“目に見えにくいもの”に挑もうとする姿勢が共通しており、子どもたちの感受性と表現力の確かさを感じる審査となった。

**田嶋 健 (木版画家)**



## 審査を終えて

佐久市児童生徒美術展は、佐久市立近代美術館が開館した翌年から佐久平の美術展小中学生の部として始められ、平成 17 年の市町村合併による新佐久市誕生から数えて 21 回目となります。令和 2 年から日向裕・綾 美術コンクールの形式となってから 6 回目の開催となり、さらに、それまでの学校を通しての募集に、個人による応募を加えてから 5 回目となります。この間、作品を作ってくださいる児童生徒の皆さん、小中学校の先生方をはじめとして学校関係者の皆様、コンクール形式となってからの審査員の皆様、そして子供たちとともに美術館に足を運んでくださる保護者の皆様に厚く御礼申し上げます。

私は今回小中学生の皆さんの絵を見させていただいて、自分の小さい頃のことを思い出しました。小学生の時写生大会に参加してクレヨンをもらったこと、家中の柱や窓ガラスに落書きをして叱られたこと。中でもある日学校の帰り道で見た夕焼けに感動して、家にあった古い黒板に絵の具で力作？を描いて、後で消せと言われて大泣きしたことなど。やがて子供向け科学雑誌や漫画を読むようになって、ロボットや宇宙ステーションの絵に興味に移り、学校でロケットの絵を描かせてくれと先生に頼んだ覚えがあります。

なぜこんな個人的な記憶をここに書いたかといいますと、成長途中の子供に限らず人は皆、周りの環境から受け取るものによって自分を形作ってゆくのではないかと思うからです。これはある意味あたり前のことではありますが、それだけではないようにも思います。人は自分の受け取ったものに疑問をもったり、自分はなぜそう思うのかということ自体を考えたりすることができるからです。

今、私たちの周りには画材や図画工作の素材が豊富にあり、映像や音楽があふれていると言えらると思います。ただそれらは大変多くの人の手を経て作られた人

為的な産物であり、使われ方に一定の方向性を持たされています。プラモデルや工作キットなどはその典型でしょう。

こうした環境は、私たちが審査の目安としている「創造性のある作品」「現代の子どもたちが、意欲をもって制作した作品」「技術の高い作品」という点からは、必ずしも良い方向に働くとは限らないのではないかと心配です。そうした中でも今回賞に選ばれた作品や、選ばれなかった作品の中にも、感じ取ったことや新たな発見が表現され見ていると楽しくなる作品、時代のリアリティが感じられる作品、生き生きと作品に向かい合っていることが感じられる作品、構図・形・色合いの優れた作品が多く見られました。

これからも、ご自分の目や耳や手足や体全体で感じ、考え、納得のゆく表現を探して行って頂きたいと思います。そして、同じような環境の中で苦闘した、あるいは今しているプロの作家たちの作品を美術館で見ることができます。小・中・高校生は無料です。ぜひ美術館にも足を運んでください。

小山雅比古（佐久市立近代美術館長）

